

# 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」における 巡礼とツーリズムの共存

北山 眞之<sup>1</sup>・片平 樹<sup>2</sup>・深谷 侑加<sup>2</sup>・矢野 兼朗<sup>2</sup>・山田 紘旭<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>名古屋大学・院, <sup>2</sup>愛知教育大学・学)

- |                             |                      |
|-----------------------------|----------------------|
| I はじめに                      | IV 世界遺産化運動とツーリズムへの対応 |
| II 長崎県におけるキリスト教史            | V おわりに               |
| III 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成遺産 |                      |

キーワード：長崎県，キリスト教関連遺産，世界遺産，巡礼，ツーリズム

## I はじめに

2003 年に「観光立国宣言」やビジット・ジャパン事業がなされて以降，日本政府は観光立国推進基本法の制定（2006 年），観光庁の設置（2008 年），中国個人観光ビザ発給開始（2009 年），「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」作成（2013 年）など，訪日外国人観光客の増加（いわゆるインバウンド観光）に積極的に取り組んできた。

その一方で，創意工夫生かした地域の主体的な取り組みを尊重し，地域住民が誇りと愛着を持つことのできる，活力に満ちた地域社会の持続可能な発展も目指されてきた。すなわち，地域における観光地化の推進である。そのためには，国・地方自治体・民間事業者による適切な役割分担のもと，各主体の地域連携を通じて情報発信力を高め，広域周遊ルートの形成や世界に通用する地域資源を磨き上げ，地域の魅力を来訪者に体感してもらうための地域づくりが肝要である。以上のように，現在の日本では官民一体の観光活動が志向されている。

こうした地域振興の動きの一つとして，自然・文化資源の世界遺産化運動が挙げられよう。世界遺産化が地域へともたらす経済効果は大きい。国内のみならず海外からも観光客が訪れることで，飲食・宿泊・土産等の観光消費額が増加するといった経済波及効果や，地域社会の活発化が期待されている（服簾 2005）。

一方で，観光地化することによる負の影響も指摘さ

れている。例えば屋久島（1993 年登録）では，世界遺産登録を契機とする観光地化によって山岳部から溪流や海浜，さらには島民の生活空間にまで観光サービス産業の範囲が拡大した。その結果，自然環境が破壊されたり，島の伝統文化や島民の生活様式に重大な影響を及ぼしているとの指摘がある（柴 2005）。また，世界遺産化が持続的な地域発展につながるかどうかという点にも疑問が呈されており，一時的な観光ブームに終わる危険性なども述べられている（淡野 2008）。

しかしながら，こうした負の影響が懸念される中でも世界遺産化の動きは日本各地で隆盛をみせており，本研究の対象地域である長崎県もその例外ではない。長崎県では，2015 年 7 月 5 日に「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼，造船，石炭産業」が世界文化遺産として登録されたことは記憶に新しい。それとともに，「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の 2016 年登録を目指して活動が展開されている。

本研究で取り上げる「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は，「宗教」を文化景観として捉え，世界遺産化しようとするものである。このような宗教景観の世界遺産化にも，やはりいくつかの問題点が指摘されている。その代表的なものとしては，巡礼とツーリズムの共存が挙げられる。世界遺産化によってキリスト教文化の認知度が高まることが期待される一方，観光客が増加することに対して聖地の保護が必要となろう。松井（2013）が指摘するように，例えば飲食や禁煙，ごみの置き去り，電気や水道の無駄遣いといった基本的なマナーの欠如だけでなく，ミサ中の私語や写真撮

影、葬式ミサの見学などで聖地の「聖性」が汚されかねない。

ホスト側となる信者は、観光客のマナーの悪さやホスピタリティの負担増に辟易しながらも、概して多くの観光客が自分たちの教会を訪れてくれることには好意的である。しかしながら、聖職者の中には教会が観光化・観光資源化されてしまうことへの嫌悪感をあらわにしている者もいる（木村 2007）。以上のように宗教景観の世界遺産化では、ただ単に価値のある素晴らしいものを保存することにとどまらず、ホストとゲストの調和を前提としたうえで観光地としての持続的発展が目指されなければならない。

そこで本研究では、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産化を取り上げ、そこに関わる主体が上述の問題点や軋轢をどのように意識し、またその解消に向けて取り組んでいるのかを明らかにしたい。最後に、現状を踏まえたうえで新たな問題点について提起する。

## Ⅱ 長崎県におけるキリスト教史

長崎県におけるキリスト教の歴史は、1550年にフランシスコ・ザビエルが平戸を訪れたことに始まる。以

後、キリスト教は西日本を中心に急速に普及し、多くの教会が建てられた。南蛮貿易における中心港であった平戸を有する長崎においても、キリスト教は確実に浸透していったのである。ところが、豊臣秀吉や江戸幕府は「26 聖人の殉教」や島原の乱などを通してキリスト教を弾圧するようになり、信者たちは以後信仰を隠し続けることになる。

江戸末期の1863年に日本が開港すると、パリ外国宣教教会のプチジャン神父が長崎を訪れた。すると、1865年に完成したばかりの大浦天主堂に浦上の信徒数十名が訪れ、神父にキリスト教の信仰を告白したという。これがいわゆる「信徒発見」であり、当時のローマ教皇ピウス9世は「東洋の奇蹟」とたたえた。しかし、明治政府はキリスト教信者を迫害し続け、「浦上四番崩れ」のような弾圧事件も起きた。キリスト教の信者が信仰の自由を黙認されるのは、キリスト教禁教の高札が撤廃された1873年以後であり、公的に認められるにはさらに明治憲法の制定（1889年）まで待たなければならなかった。

木村（2007）によれば、長崎県におけるキリスト教史の物語は輝かしい「布教」、悲惨な「弾圧・殉教」、奇跡的な「信仰堅持（潜伏）」、そして輝かしい「復帰」に要約できるという。この一連の、世界に類を見ない「宗

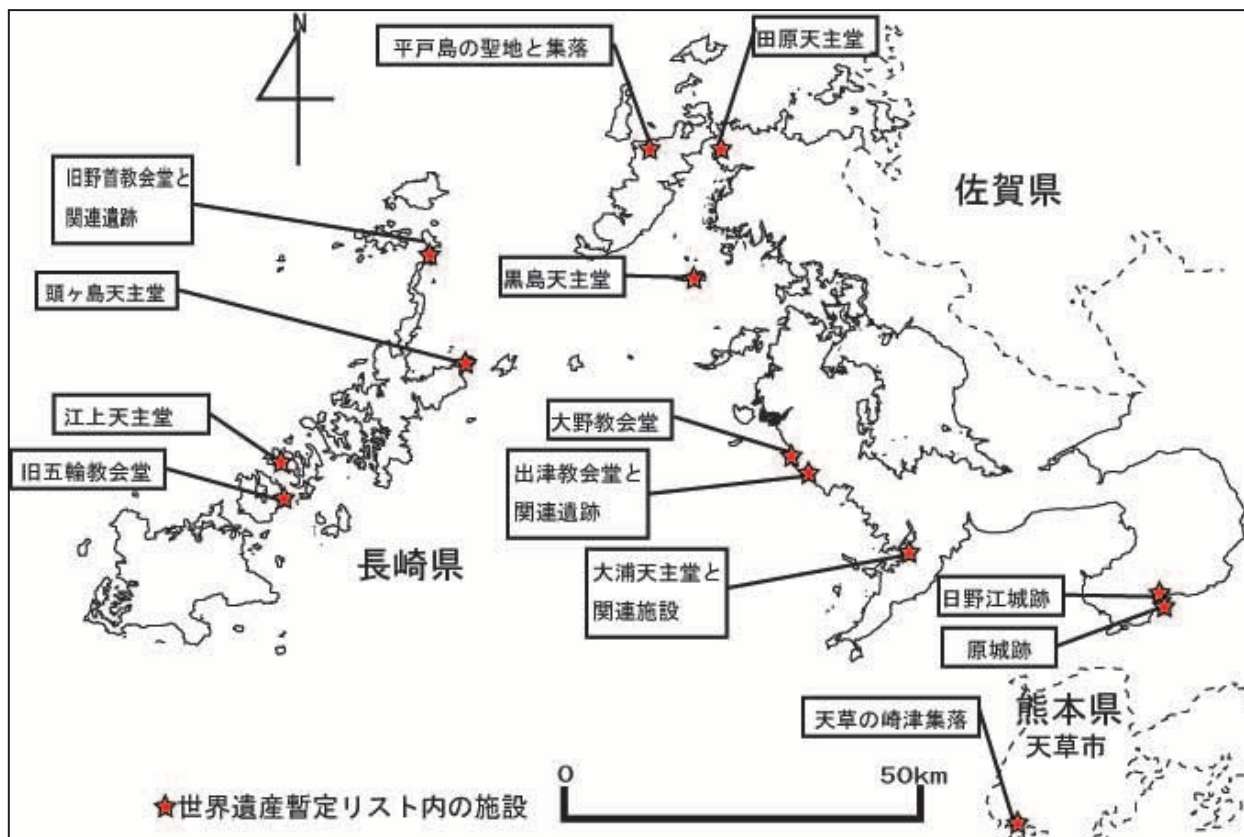


図1 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成遺産とその位置  
(長崎県世界遺産登録推進課作成パンフレットより筆者ら作成)

教物語」が「世界遺産」としての価値であるとみなされているのである。

### Ⅲ 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成遺産

「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成遺産とその位置は図 1 のとおりである。これら 13 の構成資産は、前述の長崎県におけるキリスト教史を示している。例えば、平戸の聖地と集落は「布教」、日野江城跡や原城跡はキリスト教の「弾圧・殉教」の歴史を示すものであり、野崎島の野首・舟森集落跡、天草の崎津集落跡は「潜伏」の歴史を教えてくれる。残りの教会群は輝かしい「復帰」の歴史といえよう。この宗教物語が、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の、世界遺産としての「顕著で普遍的な価値」なのである。

なかでも、長崎市内にあるゴシック様式の「大浦天主堂」(写真 1) は日本に現存する最古の教会として国宝に指定されており、和洋折衷の建築技術が高く評価されているだけでなく、「信徒発見」の舞台としてその聖性が高く評価されている。大浦天主堂は長崎観光では人気スポットの一つであり、『長崎市観光動向調査分析報告書』によると、過去 4 年間で長崎市を訪れた観光客のうち約半数が大浦天主堂を「訪れる予定」、または「すでに訪れた」としている。



写真 1 世界遺産候補である大浦天主堂  
(2015 年 3 月 20 日、筆者ら撮影)

このように、大浦天主堂は長崎にとって非常に重要な建物であると認識されている。今後、世界遺産化が進展するにつれ、こうした宗教関連施設ではさらに観光客が増加することも見込まれ、それと同時に観光地化がいつそう進展するものと考えられる。その中で、宗教景観の聖性がいかに損なわれないようにするのかわかることは、やはり重要な論点となろう。

## Ⅳ 世界遺産化運動とツーリズムへの対応

### 1. 「長崎の教会群を世界遺産にする会」の取り組み

長崎の教会群の世界遺産化運動において、まず中心的役割を果たしたのは「長崎の教会群を世界遺産にする会」(以下、「世界遺産の会」)であった。「世界遺産の会」は教会関係者、地元企業やマスメディア、行政関係者を含めた有志が 2001 年に設立した団体である。これまでに、長崎の教会群のもつ建築的価値や隠れキリシタンといった地域固有の歴史的・文化的背景などに関する学術調査・研究やシンポジウムの開催、国際交流の推進による文化遺産としての啓蒙活動に取り組んできた。「世界遺産の会」は教会の保存という課題に強い意識を向ける一方で、理念として教会の保存・公開と観光の調和を念頭に置いており、その解決策のために各種イベントを通じた啓蒙活動を行ってきた(表 1)。

### 2. 「行政」の取り組み

長崎県や長崎市では行政の立場から政教分離の考えもあり、教会群の世界遺産候補推進の体制が十分に構築されてはこなかった。しかしながら、教会群が 2006 年に世界遺産暫定リスト入りしたことで、積極的に支

表 1 「長崎の教会群を世界遺産にする会」の主要活動

年	月日	イベント名称
2000	8月19・20日	2000年度建築修復学会・五島(金蘭)大会
	5月6日	世界遺産へのフォーラムin長崎
	4月27日～5月7日	長崎の教会写真展
2001	9月22日～24日	長崎の教会でのコンサート
	9月22日～25日	長崎の教会を巡る旅
	9月28日	世界遺産へのフォーラムin東京
	3月31日	長崎の教会群を世界遺産にin外灘シンポジウム
	6月7日・8日	長崎の教会を巡る旅
	10月12日	シンポジウム「長崎の教会群を世界遺産に」
2002	10月16日～20日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」展 長崎展
	10月25日～11月3日	秋の五島列島 church week
	10月31日～11月2日	五島教会巡礼ツアーとコンサート
	11月17日	日曜日 五島教会巡り
	9月29日～10月10日	模写とパネルで見る長崎の教会群(長崎)
2003	11月2日	トン・ゴープマン オルガンコンサート(博上天主堂・長崎)
	11月10日～29日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」展 東京展
	11月11日～30日	世界遺産登録を目指して 第3回「長崎の教会群」展
	5月10日～14日	長崎の教会群の写真展(東京)
	5月22日～8月29日	開国150周年記念 横浜・長崎 教会建築史紀行(横浜)
	5月11日～21日	三沢博昭写真展「大いなる遺産 長崎の教会」(福岡)
	6月18日～24日	三沢博昭写真展「大いなる遺産 長崎の教会」(大阪)
	7月2日～8日	三沢博昭写真展「大いなる遺産 長崎の教会」(東京)
2004	7月17日	講演会「教会堂の誕生in横浜・長崎」(横浜)
	7月17～25日	写真展「世界遺産への道 ながさきの教会群」(横浜)
	7月25日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」横浜講演会
	8月21日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」横浜講演会
	12月28日～1月11日	写真展「世界遺産への道 ながさきの教会群」(長崎)
	3月22日	Easter concert 五島列島キリシタン400年(長崎教会・長崎)
	4月6日	長崎歴史文化講演会(長崎)
2005	7月8日～10日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」in五島
	10月18日～11月5日	「天主堂再考～模写とパネルで見る長崎の教会群」展
	12月24日・25日	市民クリスマスページェント(長崎)
	10月28日・29日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」in 平戸講演会
2006	12月22日～27日	サテライト生誕500年記念「長崎の教会群を世界遺産にする会」活動報告展(長崎)
2007	2月14日	シンポジウム「長崎から世界遺産へ」「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」(長崎)

(松井(2013)より転載)



援する動きが見られるようになった。2015 年現在、「世界遺産の会」に代わり世界遺産化運動の主体的な担い手となっているのが、長崎県知事公室世界遺産登録推進室や長崎県世界遺産登録推進課である。長崎県世界遺産登録推進課は推薦書チーム、整備・活用チーム、総務・広報チームの3つに分かれて世界遺産化に向け

表 2 長崎県世界遺産登録推進課のチーム構成

	①推薦チーム	②整備・活用チーム	③総務・広報チーム
主な活動内容	ユネスコに提出する推薦書や各種資料の作成	「修景」作業	長崎教会群に関するPR活動
具体例	2015年1月に正式版の推薦書をユネスコに提出する等	教会にかかる電線の移動、雑草の除去等	パンフレットの作成やグッズの製作

（筆者らの聞き取り調査（2015 年 3 月 20 日実施）による）

た業務を行っている（表 2）。

長崎県が世界遺産の活用として考えているのは「歴史ブランド化」である。これは文化財を、世界遺産候補である 13 の「A 資産」、A 資産を核に構成資産候補となった「B 資産」、さらには重要文化財の「C 資産」に分けたものである（図 2）。これら A から C までの文化財を一体的に保護し、文化財としての価値をふまえたうえでの活用・公開の推進が取り組まれているのである。特に C 資産のピックアップ作業では、文化財の世界遺産的価値や候補資産との関連性、あるいは文化財としての保護だけでなく、可能な限り一般に公開されていることや、人々にとって魅力的であることが必

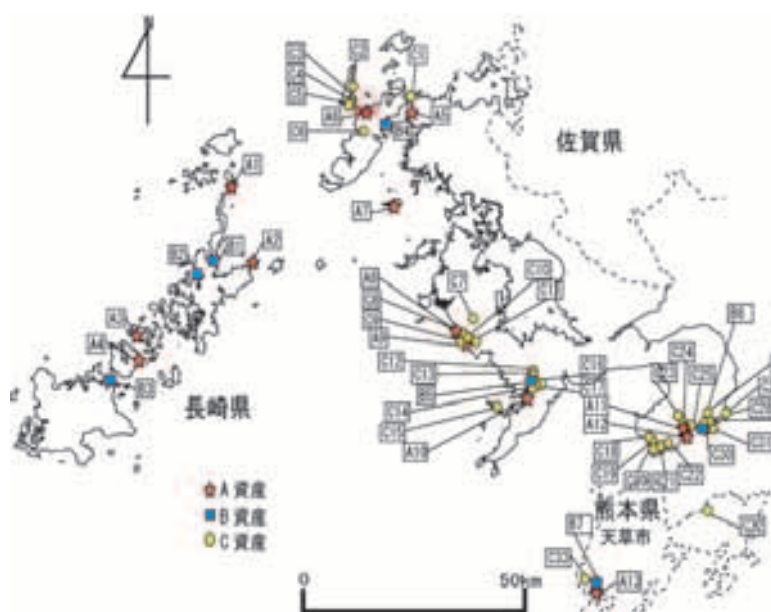
要とされている。ここからも分かるように、文化財の保護を念頭に置きながら、特に世界遺産候補とならなかった B 資産や C 資産を含めて、観光客のまなざしをかなり意識した内容となっている。また、博物館や資料館、関連スポットも加えることで、広域的な地域活性化や歴史文化を活かしたまちづくり、交流人口の拡大につなげることも県の大きな目的である。実際、NPO 法人長崎巡礼センター主催の巡礼ツアーの中でも B・C 資産が多く紹介されており（写真 2、写真 3）、A～C 資産のすべてが長崎県におけるキリスト教史を伝える重要な資源を構成している。

また、長崎市も総務局に世界遺産推進室を設置しており、モニターツアーを行っているほか、子ども向け DVD やパンフレットの作成、外海地区における石積み集落の保存計画を遂行している。これにより、長崎市内の世界遺産候補地が整備されている。

### 3. ツーリズムにともなう負の影響とその対策

県世界遺産登録推進課に対する聞き取り調査によると、観光地化にともなう負の影響が以下のように挙げられた。

- ①トイレの無断使用
- ②違法駐車，無断駐車
- ③鐘を勝手に鳴らす
- ④聖水を灰皿代わりにする
- ⑤泥酔状態での見学



分類	No	資産名		
A	1	野崎島の野原・府森遺跡群跡	7	次良庵洞窟跡
	2	湯ヶ島天主堂	8	野添共同墓地
	3	江上天主堂	9	大平作業場跡
	4	田古輪教会堂	10	バスチン屋敷跡
	5	田平天主堂	11	松松神社
	6	平戸島の聖地と集落	12	幕府時代のキリシタン墓群
	7	黒島天主堂	13	浦上教会
	8	大野教会堂	14	サント・ドミンゴ教会跡
	9	出津教会堂と関連施設	15	馬込教会
	10	大浦天主堂と関連施設	16	トードス・オス・サントス跡
	11	日野江城跡	17	出島和蘭商館跡
	12	原城跡	18	砂原キリシタン墓群
B	13	天草の崎津集落	19	遠崎キリシタン墓群
	1	青砂ヶ崎天主堂	20	白浜キリシタン墓群
	2	大野教会堂	21	南島船乗組の地
	3	堂崎教会堂	22	吉川キリシタン墓群
	4	宝亀教会堂	23	西正寺キリシタン墓群
	5	日本二十六聖人殉教地	24	谷川「流しや」キリシタン墓群
	6	吉利支丹墓群	25	有馬のセマリジ跡地
	7	天草の今置集落	26	有馬キリシタン定跡公園
	1	焼野	27	宮の森キリシタン墓群
	2	殉教地・焼山	28	聖坊キリシタン墓群
	3	殉教地・ガスバル様	29	中瀬川キリシタン墓群
	4	殉教地・千人塚	30	湊川キリシタン墓群
	5	殉教地・ダンジク様	31	小川キリシタン墓群
C	6	クシノキの森	32	正覚寺キリシタン墓群
			33	大江教会

図 2 長崎県の定める A 資産，B 資産，C 資産の位置  
（長崎県世界遺産登録推進課作成パンフレットより筆者ら作成）



写真 2 日本 26 聖人殉教地 (B 資産)

(2015 年 3 月 20 日, 筆者ら撮影)



写真 3 浦上教会 (C 資産)

(2015 年 3 月 20 日, 筆者ら撮影)

#### ⑥ミサ中の私語

#### ⑦海外旅行客の生活・文化の違いによる影響

①～⑦のいずれもが観光客によるマナーの欠如に起因するものである。これらは行政に対して信者から実際に苦情が来たものであり、県や市は次のような対策をとってきた。例えば、マナーの向上のためにウェブサイトやパンフレットで注意喚起が行われている。これにより信者からの苦情件数が減ったことから、一定の効果があったと考えられる。また近年は、⑦のように特に韓国・中国人観光客の生活・文化の違いによって、マナーが守れていないとの苦情が出てきている。それらに対しては英語・ハングルで書かれたウェブサイトを作り、注意喚起がなされている。長崎市は市内の世界遺産候補地である大野教会堂に市営のトイレを設置したり、駐車場の整備を行ったりしている。ただし、駐車場に関しては景観保護の観点からコンクリートを敷き詰めたものにするのではなく、砂利道のままにするといった配慮も行っている。

#### 4. 世界遺産登録を見越した遺産保護対策

3 で述べたものは、現状すでに発生している負の影響とその対策である。しかしながら、世界遺産登録が実現した場合、「石見銀山遺跡とその文化的景観」のように観光客の爆発的増加が予想される。石見銀山では世界遺産候補地に推薦される前は年間 40 万人ほどの観光客であったのに対し、世界遺産登録直前は 70 万人にもなった。「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」も観光客の増加が予想されており、その対応が課題として挙げられている。

現在長崎県が考えているのが、教会堂（構成資産）見学の事前連絡の仕組みである。県は、民間組織と協力し 2014 年 4 月に「長崎の教会群インフォメーションセンター」を開所した。当センターは既存の民間組織が協働で業務を行うことにより、観光客の対応窓口としての機能を担うものである。これは、電話やウェブサイトを利用して見学希望者の受付を行うことで、マナーや見学可能時間帯の事前周知を行うとともに、聖性を汚さないようにある程度の人数制限を図ろうとする取り組みである。また、葬儀などで急に見学が不可能になってしまった場合の連絡も可能である。ほかにも、旧五輪教会堂など離島にあって船を必要とする構成資産の場合、事前連絡により船の手配ができるというメリットもある。

この仕組みは、2014 年 8 月から出津・田平で試行されており、将来的にはすべての構成資産で導入し、増加することであろう観光客の制限を行う予定であるという。また、教会堂で協力金（維持・管理費）を集める手段も計画されている。あるいは地域の信者が担い手となり、教会付近に常駐し、訪問者のマナー監視や質問への対応等を担ってもらい「教会守」と呼ばれる人々を対象教会に配置することも長崎県は考えているようである。ただし、人手不足もあり配置できていない教会もある。

#### V おわりに

本研究の結果、長崎県や市は、先行研究で指摘されるような世界遺産化とツーリズムにともなう負の影響を問題としてとらえ、ホスト・ゲストの調和を目指す一定の対策をとってきたことが明らかとなった。具体的には、マナーの周知や事前連絡による人数制限体制の構築などが挙げられる。しかしながら、人数制限は観光客の増加に歯止めをかけるものであり、行政にとっては必ずしも有益な方法とは言えない。それでも行

政が人数制限を行おうとする背景には、ただ単に価値のある素晴らしいものを保存し、知らしめるということを目指すのではなく、ホストとゲストの調和をもとにした持続可能な観光地化が強く意識されているためであろう。

また、観光客の増加による経済効果が期待されているものの、最重要視するのは、顕著で普遍的な「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」に対して地域住民が誇りや強い愛着を持つことである。例えば、長崎市の人口は2006年時点では約45万人だったのに対し、2015年には約43万人に減った。長崎市の人口減少は少子高齢化の影響だけでなく、県外への転出も大きな原因の一つになっているという。このような問題の対策として、地域への誇りや愛着を住民が持てるようにする必要があり、世界遺産化運動がそこに一役買うことを行政は期待しているのである。

一方、現在の世界遺産化に対する取り組みをみると1つの課題も指摘できる。既述の通り、行政は世界遺産の活用として「歴史ブランド化」を行っている。しかしながら、この取り組みは観光客のまなざしを意識しすぎている点で問題があるものと考ええる。例えば、行政がピックアップするC資産の要件は、観光客にとって魅力的であることが重視されている。しかしながら松井（2012）が指摘するように、その結果宗教のモノ化が起こってしまう可能性がある。つまり、宗教景観にツーリズムの価値観が強く投影されることで、元来地域住民が大切にしてきた宗教的・地域的な価値観が失われ、歴史や遺産といったツーリズム的価値へと再編されてしまう危険性である。例えば教会は世界遺産化以前、信徒にとって儀礼の場所としての宗教的な空間であり、歴史的・芸術的な価値とは無縁の空間であった。しかしながら、世界遺産化によって歴史的・芸術的価値が付与されることで、否応なしにツーリズムによる教会の世俗的序列化が起こってしまうのである。

また、国宝・重要文化財・無指定といった国が認定する文化財カテゴリーが、あたかも宗教的な地域文化への価値づけとみなされる危険性や、社会の価値観の投影によって宗教景観が新たな文脈へと再編されるおそれも松井は指摘している。

宗教景観に文化財としての価値を付与することは、文化的価値を後世に残していくという点において、確かに有効な方策である。今後は、そうしたツーリズムや国家的な価値づけの枠組みを通じたカテゴリー化が、もともとの宗教的・地域的価値を損なわないようにする対策も必要なのではないだろうか。

## 謝 辞

本研究の調査にあたり多くの方々のご協力をいただきました。ご多忙のなか聞き取り調査に応じていただいた長崎県世界遺産登録推進課の方々、長崎市総務局世界遺産推進室の方々、NPO 法人長崎巡礼センターの方々にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 淡野明彦 2008. 世界遺産と観光に関する地理学的アプローチ.  
地理空間 1-2 : 114-127.
- 木村勝彦 2007. 長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム.  
長崎国際大学論叢 7 : 123-133.
- 柴 鐵生 2005. 屋久島の森との共生. 都市問題 96-6 : 9-13.
- 服藤圭二 2005. 世界遺産登録による経済波及効果の分析－「四国八十八ヶ所」を事例として. ECPR 2005-1 : 45-51.
- 松井圭介 2012. ヘリテージ化される聖地と場所の商品化. 山中弘編『宗教とツーリズム－聖なるものの変容と持続』192-214. 世界思想社.
- 松井圭介 2013. 『観光戦略としての宗教－長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会.

## 雑誌・ウェブサイト等

- 『財界九州』（2007年5月号）. 観光客増見込めても入り交わる「期待」と「不安」. 55-57.
- 『財界九州』（2008年3月号）. 世界遺産登録へ取り組みを進める長崎県. 91-99.
- 『ながさき経済』（2007年6月号）. 長崎の教会群を世界遺産に. 1-8.
- 『ながさき経済』（2013年8月号）. 長崎の教会群とキリスト教関連遺産－長崎から世界遺産を！－第10回目. 28-31.
- 『ながさき経済』（2013年9月号）. 長崎の教会群とキリスト教関連遺産－長崎から世界遺産を！－第11回目. 26-28.
- 長崎市総務局世界遺産推進室：  
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/792000/792400/p005903.html>（最終閲覧日 2014年12月17日）
- 長崎市観光動向調査分析報告書：  
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/750000/755000/p023855.html>（最終閲覧日 2015年2月21日）
- 長崎県観光統計データより観光客数：  
<https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kanko-kyoiku-bunka/kanko-bussan/statistics/kankoutoukei/2000.html>（最終閲覧日：2015年2月21日）

長崎県世界遺産登録推進課：

[https://www.pref.nagasaki.jp/s\\_isan/index.php](https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/index.php)（最

終閲覧日：2015 年 4 月 24 日）

長崎の教会群インフォメーションセンター：

<http://kyoukaigun.jp/>（最終閲覧日：2015 年 4 月 24 日）

長崎県世界遺産登録推進課作成パンフレット：

[https://www.pref.nagasaki.jp/s\\_isan/file/01pamphlet\\_japanese.pdf](https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/file/01pamphlet_japanese.pdf)（最終閲覧日：

2015 年 4 月 24 日）

歴史文化遺産群イメージ図および地図：

[https://www.pref.nagasaki.jp/s\\_isan/file/20140730rekishi.pdf](https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/file/20140730rekishi.pdf)（最終閲覧日：2015 年

4 月 26 日）